令和4年度　入学試験問題

医　学　部　（Ⅱ期）

英　語（必須科目）
数　学・国　語（選択科目）

注　意　事　項

1. 試験時間　令和4年3月5日，**午前9時30分から11時50分まで**
2. 配付した試験問題(冊子)，解答用紙の種類はつぎのとおりです。

(1)　**試験問題**(冊子，左折り)(表紙・下書き用紙付)

英　語
数　学(その1，その2)
国　語(その1，その2)

(2)　**解答用紙**

英　語		1枚(上端黄色)(右肩落し)
数　学(その1)		1枚(上端茶色)(右肩落し)
〃	(その2)	1枚(上端茶色)(左肩落し)
国　語(その1)		1枚(上端紫色)(右肩落し)
〃	(その2)	1枚(上端紫色)(左肩落し)

数学，国語は選択した1科目(受験票に表示されている)が配布されています。

3. 下書きが下書き用紙で足りなかったときは，試験問題(冊子)の余白を使用して下さい。
4. 試験開始2時間以降は退場を許可します。但し，試験終了10分前からの退場は許可しません。
5. 受験中にやむなく途中退室(手洗い等)を望むものは挙手し，監督者の指示に従って下さい。
6. 休憩のための途中退室は認めません。
7. 退場の際は，この試験問題(冊子)を一番上にのせ，挙手し，監督者の許可を得てから，試験問題(冊子)，受験票，下書き用紙および所持品を携行の上，退場して下さい。
8. 試験終了のチャイムが鳴ったら，直ちに筆記をやめ，おもてのまま上から解答用紙〔英語，数学(その1)，数学(その2)，または，国語(その1)，国語(その2)，計3枚〕，試験問題(冊子)の順にそろえて確認して下さい。確認が終っても，指示があるまでは席を立たないで下さい。
9. 試験問題(冊子)と下書き用紙は持ち帰って下さい。
10. 監督者退場後，試験場で昼食をとることは差支えありません。ゴミ入れは場外に設置してあります。
11. 試験会場内では，昼食以外は，常にマスクを着用して下さい。
12. 休憩時間や昼食時等における他者との接触，会話を原則禁止します。
13. 午後の集合は1時です。

国　語（その1）

一　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

私たちは年じゅうことばづかいに戸惑っているが、ときには、もっとも適切と思われる言いかたが自分にはよくわかっているのに、ことさらに迷っているふりをするという人も、いないわけではない。いわば、自然発生的な現象としての《ためらい》の表現と、技法として《ためらい》のふりをする表現とが、ある……と言えばある。

伝統的レトリックの理論は、効果的な言語表現の技術という看板をかかげていたわけだから（そしてその限界も、みずからを《技術》としか見なしていなかったところにあったのだが）、その枠のなかでは、《ためらい》の表現も一般には、ためらうふりをすることであった。[a]ギタイである。したがって概論書のたくさんもたいては、「ためらっているように見えるばあい」ないし「見せるばあい」というような説明を与えていた。

レトリックという、言語的認識のもっともとらえにくい[b]キビにかかわる問題をあつかうのに、なぜか古来のレトリック研究者たちは、ものごとをあっさり単純化して見たがるたちの人が多かったようである。そして、［　①　］とは、いつもはっきり区別されうると考えていたふしがある。

〔　A　〕、極端なケースを考えてみれば、信じていることと信じているふりをすることはおおいにちがうし、真実を語ることと真実らしく語ることは別である。しかし、じっさいの言語は、たいていのばあい、それほど単純なものではなかろう。

最近二つの論文集を読んだ。（……）芸術を愛してゐる小説作家と芸術などを愛する事は愚劣と信ずる文芸批評技師とによつて書かれたこの二つの論文はもちろん大くん趣の変つたものだが、両方とも同じ様に仰々しく（颯爽としてゐるといふ人もあるかもしれない）、同じ様に粗雑な論理で（簡潔だといふ人もあるかも知れない）、著者の心底を見極め様としたら、大骨を折らねばならぬ、といふ点で私を退屈させた。（小林秀雄「アシルと亀の子」Ⅰ）

ここで語り手は、ことばづかいに迷っているのではない。それどころか、わずかこれだけの短い引用からでも感じとられる第一の特性は、その文章の歯切れのよさであろう。じっさい、ここで問題とされているふたつの論文は、まことにはっきりと、「仰々しく」かつ「粗雑な論理」しかそなえていないものと宣告されているのだ。その断言には、［　②　］ようである。それほど、この啖呵（たんか）は威勢がいい。

〔　B　〕、その断定のあとに、この筆者は奇妙なただし書きを、丸かっこでつつんで置いた。そのせいで私たちは、思わずにやりと笑うことになりそうである。無論、啖呵とは喧嘩における

見せものであるから、ことのついでに見物衆のサービスに工夫をこらすというのはよくあることで、現に実際の路上で、時計を見ながらいそいで通りすぎるのが惜しまれるような上出来の喧嘩に出会うことも、ないわけではない。しかし東京の街路も、やがては実用的に人を霞うような野蛮な闘争しか発生しない非文明的な場所になっていくのであろうか。海のかなたからそういう風潮が次第に押しよせているという説もある。

（中略）

ともかくここで仰々しさと粗雑な論理のあとにつけ加えられてある《ためらい》めいた「颯爽」と「簡潔」ということばは、いわばまことに文明的な言語表現なのだ。それは真剣でありながら遊んでいるという点で、まぎれもなく野蛮の正反対のものであった。どちらかと言えばいつもあまりに真剣でありすぎる、そのために私たち読者を疲れさせることもあるこの散文の達人のレトリックのなかでは、めずらしい遊びがここにある。

若いころから一貫しているこの著者の文体の、したがって思考の、歯切れのよさを私たちはよく知っている。しかしそれは、歯切れのいい分類法や整理法ではいっこうにらちのあきそうもない問題――ことばで言いあらわそうとするとひどく厄介なことになる問題――についてばかり語りつづける人の、いわばひらきなおりに近い歯切れのよさであった。つねにとめどない《ためらい》のなかに落ちこんでしまいそうな過剰な思いを、かろうじて未練を断ち切るように、[c]アえてことばに託してみる、という切れ味のよさであった。自分の表現に何の不安も感ずることなく立て板に水を流す人々のことばとは、およそ異質な歯切れである。

自分だけのことばではない言語、自分のなかの他者である言語に託して何かを――しかも[d]ケッペキすぎる真剣さをもって――語ろうとするなら、どうしてよどみなくことばを流しつづけられるだろう。他者であることばにゆだねられた事実は、ことばとなって外へ出た途端に虚偽になっているかもしれないのだ。ことばは、残念ながら〔　ア　〕であるほかはない。とすれば、[ア]ことさらに表現を相対化してみるという手もまたひとつの知恵であった。

つねに真剣すぎる人の文章が、ときには《ためらい》をことさらに断ち切るような啖呵のかたちをとったり、逆に、《ためらい》を戯画的に演ずることによって表現を相対化したり、つまりはなはだしくレトリカルになる、というのはけっして不思議な現象ではあるまい。

その結果、この卓越した散文家の文体は（すなわち思考は）つねに颯爽として、おおくのばあい簡潔なその躍動によって私たちを魅惑しつづけるのである。ただし、それを仰々しく粗雑な論理の展示にすぎないと感ずる読者もまた、[e]イカンながらありうるだろう。

（中略）

レトリックのあやとしての《ためらい》は、基本的にはひとりの発言者が自分自身の思考と表現において戸惑う形式であるが、第一に、（先ほども触れたとおり）それが［　③　］という区別はそれほど明瞭なことがらではない。ときには意図的な技法としての《ためらい》が表現の上で有効だとすれば、それは、言語表現というものが本来《ためらい》的ないとなみだという事実に由来しているだろう。言語の本質的な相対性という原理が、しばしば《ためらい》という現象を生み出す

のだ。〔　C　〕《ためらい》という技法もまた、現象とおなじ原理にもとづいてないかぎり、多少といえども効果をあげるはずがない。

古来、さまざまの修辞の《あや》は、もっぱら効果的な表現の技法の型として検討されてきた。そして近代、それらは、たかが技法《にすぎない》ものとして、ないがしろにされたのであった。しかし、もしそれらがときどき技法として効果を発揮したものだとすれば、とりもなおさず言語のなかにひそんでいるさまざまの原理的傾向を反映していたからであった……という（よく考えてみればごく当然の）事実に、近代人たちはとんと気づかなかった。言語表現の技法という名称に対して無反省にさげすみの目を向けてしまう近代精神の（科学から文学まで広い文化領域にわたる）共同幻想のせいであった。技法と呼ばれていた多様な《ことばのあや》がじつは言語的認識のさまざまな原理的特性の名称でもあったということを、私たちに気づかせなかったものは、その［　④　］である。

ところで、ためらいの表現にあらわれる相対性には、第二の側面がある。

それは、ことばの語り手と聞き手が別人だというわかりきった事実から生ずる相対性であって、発言者がどれほど確信をもって語ったことばでも、いったん口から出てしまえば、その確信どおりに受けとられる保証はまるでない、ということでもある。

世間にはうらやましいほど確信をもってとうとうとしゃべりまくる人もけっこういるけれど、なにぶん周囲にはそのほかにも毛色の変わった確信がいろいろあるわけで、けっきょく私たちの言語活動の場面は、観客にとっておもしろいかつまらぬかを別とすれば、つねに演劇的であるほかはない。たがいに色調のことなる複数の確信が（あるいは複数の心ぼそさが）もつれあって私たちの言語の舞台をかたちづくる。そのさい、深刻に理解し合えたり楽しく誤解し合えたり、ともかく、まがりなりにもおなじ舞台でことばのやりとりができるのは、私たちひとりひとりが一さつずつ自分のなかにもっている［　⑤　］が、ずいぶん違っているように思われながら、基本的にはよく似ているおかげである。それは、よく似ているけれど微妙にちがっているということでもあろう。その結果、確信とともに口から出たことばも、外気に触れたとたんにどことなく心ぼそい存在に変わってしまうということでもある。それは、しあわせな発言者自身が断固として確信と持論のなかに安住していたとしても、当人の支配力がじゅうぶんにはおよばぬ演劇的ないしコメディー的空間での現象であるから、ふせぐことはむずかしかろう。

けっきょく、古典的な《ためらい》の定義のなかで了解されていた「ひとりの発言者が自分自身の思考と表現において戸惑う」という部分は、いくらか修正したほうがいいようである。〔　D　〕、発言者自身がいっこうに躊躇せずに口に出したことばも、たちまち相対化され、醒めた耳によって《ためらい》のなかで聴きとられる、というありふれた現象を考慮に入れなければならないのだ。じつさい私たちは、そういう現象を言語化してあらわした微妙な《ためらい》表現の例をふたつほど読んだばかりである。

ほんのわずかに《ためらい》とはニュアンスのちがう態度で、あるひとつのほとんど名状しがたい「何ごとか」を言いあらわすために、似たような意味のことばを積極的にいくつもならべていく

ばあいがある。そのどれも決定版と呼べるような的確な表現ではないと承知の上で、あるいはそう承知しているからこそ、さまざまの方向から〔　イ　〕な接近をこころみる。そのような表現形式は、伝統的なレトリックの理論において《類義累積》と命名されていた。ヨーロッパで、シノニミー(注)あるいはそのほかの用語で呼ばれていたことばのあやである。

この《類義累積》は、いわば積極的に、Aとも言える、Bとも言えそうだ、Cと言ってもいい……というぐあいに類義表現をつみかさねていく。それに対して《ためらい》のあやは、Aではない、Bでもない、Cとも言い切れぬ……というかたちに、何となく〔　ウ　〕にことばづかいに迷う。その二種類の姿勢はきわめてよく似ているだろう。

ところで、ことばへの迷いが表現を相対化するのはふつうのなりゆきだが、その逡巡がこうじたかたちとして、やがて相対化そのものをあきらめたような不思議な表現が成立することもおおいにありうる。《ためらい》の極限は、意外にも《類義累積》とは正反対のすがたを見せ、［　⑥　］に似てくるようである。

島村は少し恥かしさうに苦笑して、「どうもありがたう。手伝ひに来てるの？」

「ええ」と、うなづくはずみに、葉子はあの刺すやうに美しい目で、島村をちらつと見た。

島村はなにかに狼狽した。（川端康成『雪国』）

雪国の温泉宿に滞在中の島村は芸者駒子のなじみである。彼は、駒子の妹のような存在、謎めいた娘葉子に、ほとんど自分でも気づかずに惹かれているようである。葉子がある日、駒子からの結び文を持たされて来た。

彼を狼狽させたものは「なにか」であった。そのことを報告している表現者は、いわば名状しがたい何ごとかをめぐって類義表現を累積し、ウ周囲を埋めつくすようにしてその中心部にあるはずの「何か」を、空虚のまま造形しようとこころみることも、すればできたであろう。しかし、ここでの《ためらい》は、極端なかたちをとって、類義累積とはまるで逆のすがたになった。

名づけがたいものを、いわば名づけがたさ――ためらいの極限――そのものの名称によって呼ぶ。結果的に、表現者はそのためらいをそっくり読者がわに転嫁したのである。

世のなかのものごとはすべて、〔　エ　〕には「なにか」と呼ばれていい資格をもっている。何ごとかを「なにか」と呼ぶのは、それに呼び名を与えないという呼びかたである。にもかかわらず、そのためらいを転嫁された私たち読者にとって、「島村はなにかに狼狽した」というこの文章は、いっこうに異様な感じのものではなく、私たちはそれをごくすなおに理解してしまう。それは、常套句とまでは言わないにしても、けっして、［　⑦　］ではない。

習慣によるのだろうか、私たちは、このような表現を理解しうる自分たちの能力（あるいは言語の能力）に驚くことを忘れてしまっている。それがどれほどレトリカルな表現であるかを、気づかないうちに理解してしまいそうである。そして、そういう半習慣的現象は、読者どころか、

当の表現者のがわにさえあるかもしれないのだ。無論、それはそれでけっこうなことであって、じっさい、日常のことばづかいについて、自分が理解しうるということにいちいち驚きながら理解する……などという手間ひまをかけてはいられないくらい、どうやら私たちはみんないそがしいらしい。

島村はいったい何に狼狽したのであろうか。それはたぶん〔　オ　〕である。私たちが理解したものは［　⑧　］ではなかったのだ。私たちは、その「なにか」を理解しえた《つもり》になった。そしてそのつもりこそ、このばあい、いちばんまともな理解のしかたに相違ない。作家自身もまたこの「なにか」がわかったつもりで書いていたにちがいないからである。

ことばの意味というものが、ことばの外形によってていねいに梱包され、そのまま受け渡しされるような《中身》という名の品物だと考えているかぎり、私たちには、こういう文章がなぜわかるのかという理由がけっしてわからないだろう。ここで表現者は、いわば中身不明のままことばを私たちに渡した。私たちは、中身不明のままそれを受けとった。双方で、わかったつもりになった。そして私たちは、しみじみと何かをじっさいに感じたのである。その奇妙な仕組みは、たぶん、このばあいよりももっと《意味》の充実しているふつうのことばについてもまたおなじように作用しているはずである。

いったん辞書の内部から外へ取り出され、じっさいに受け渡される段になると、すべてのことばの意味は、［　⑨　］、とでも言えそうである。

（佐藤信夫『レトリック認識』一部省略）

（注）　シノニミー：synonymy（英語）またはsynonymie（フランス語）。同義性、類義性、同義語畳用。

設問1　空欄［　①　］に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ためらっていることとためらっていないこと

イ　ためらうこととためらうふりをすること

ウ　ためらっているように見えることとためらっているように見せること

エ　ためらいの表現とためらいの技術

オ　ためらいを語ることとためらいに関するじっさいの言語

設問2　空欄［　②　］に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　わずかばかりの芸術的センスもない

イ　少しの退屈さもない

ウ　これといった意義はない

エ　みじんの迷いもない

オ　寸分も科学的根拠はない

設問3 傍線部ア「ことさらに表現を相対化してみるという手」とあるが、具体的にどのような表現をすることか。小林秀雄の引用文(「アシルと亀の子」I)を用いて、例を示しながら説明しなさい。解答は二行以内で書きなさい。

設問4 空欄 ③ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 真実としてであるか真実とは無関係のものとしてであるか
イ ためらっているものとしてであるかそうではないものとしてであるか
ウ 言語の現象としてであるか本質にかかわるものとしてであるか
エ 意図的な技法としてであるか自然発生的な現象としてであるか
オ 信頼して発した言葉としてであるか信用せずに発した言葉としてであるか

設問5 空欄 ④ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 原理的傾向
イ 表現の技法
ウ 《ためらい》の表現
エ 近代的妄想
オ 言語の本質

設問6 傍線部イ「その確信どおりに受けとられる保証はまるでない」とあるが、これとほぼ同義の内容を表す文が、傍線部イよりもあとに二箇所ある。いずれもそれぞれ一五字以上二五字以内の一文で書き出しなさい(句読点等の記号も一字分として数えること。冒頭の一字下げは不要)。

設問7 空欄 ⑤ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア スケッチブック
イ ノート
ウ 国語辞典
エ バイブル
オ 日記

設問8 空欄 ⑥ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 数学　イ 演劇　ウ 沈黙　エ 逡巡　オ 躊躇

設問9 傍線部ウ「周囲を埋めつくすようにしてその中心部にあるはずの「何か」を、空虚のまま造形しようとこころみることも、すればできたであろう」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　島村を前にして葉子に秘められた謎を、ひとつまたひとつと読者に対して解き明かし、ふたりの思いを形にしていくこと。

イ　島村を狼狽させた何かを、他のものに無理やりおきかえることなく、得体のしれないなにかとして積み重ねていくこと。

ウ　島村と葉子の周囲に駒を位置づけて、島村の狼狽の原因を三角関係の中心に見出そうとすること。

エ　島村を狼狽させた原因を、あれかもしれない、これかもしれないといって具体的にいくつも列挙すること。

オ　島村と葉子の間にある心の空白地帯はそのままにして、島村と葉子のそれぞれの心の動きをひたすら描写していくこと。

設問10 空欄 ⑦ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　見おぼえのある文芸作法

イ　見ることのなかなかないイメージ

ウ　見なれない文章のかたち

エ　見なれた表現

オ　見たこともない慣用句

設問11 文中の〔　ア　〕から〔　オ　〕に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次の四つの語群の中から一つ選び、番号で答えなさい。

[1]	〔ア〕懐疑的	〔イ〕無自覚的	〔ウ〕刹那的	〔エ〕状況的	〔オ〕自明
[2]	〔ア〕両義的	〔イ〕非効率的	〔ウ〕疑念的	〔エ〕感覚的	〔オ〕無意味
[3]	〔ア〕相対的	〔イ〕近似値的	〔ウ〕否定的	〔エ〕論理的	〔オ〕愚問
[4]	〔ア〕複合的	〔イ〕無差別的	〔ウ〕懐疑的	〔エ〕現実的	〔オ〕不明

設問12 文中の〔　A　〕から〔　D　〕に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。同じ語の重複使用は認めない。なお、使用しないものが一つある。

〔ア〕すなわち　〔イ〕もちろん　〔ウ〕しかし　〔エ〕あるいは　〔オ〕そして

設問13　空欄 ⑧ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　その「なにか」の根拠

イ　その「なにか」が存在するということ

ウ　その「なにか」を理解したひとがいるかいないか

エ　その「なにか」をめぐる人間関係

オ　その「なにか」が何であるか

設問14　空欄 ⑨ に入る最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　語の本来の《意味》が消失した地点において理解される

イ　理解の《つもり》にささえられてはじめて理解される

ウ　辞書の《定義》に即してはじめて正しく理解される

エ　あるべき《中味》を何かに置き換えることによって理解される

オ　《ためらい》ばかりで不正確にしか理解されない

設問15　筆者は言語表現の効果をなぜ技法として示すことができると考えているか、その理由を二〇字以上三〇字以内の一文で説明しなさい（句読点等の記号も一字分として数えること。冒頭の一字下げは不要）。

設問16　傍線部a～eのカタカナを文意に即して漢字で書きなさい（楷書で明確に書くこと）。

a　ギタイ　　b　キビ　　c　ア　　d　ケッペキ　　e　イカン

国　語（その2）

二　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

物理学や天文学の場合、ここでの人間は観測者、すなわち科学者である。一般市民ではない。しかし、これが生命科学の領域となると、観測者だけでなく研究成果の受け取り手として、専門家以外の人たちを含まざるをえないという状況が現出している。

もともとは博物学の一分野だった生物学が、一九世紀に独立した分野となり、生理学、進化学、細胞学、遺伝学、分子生物学と新しい領域を広げていくにつれて、人とそれ以外の生物との境界はどんどん消失しつづけた。この流れは、二〇世紀後半の脳神経科学の発展に至って頂点に達し、基礎研究の成果がそのまま、人間についての言明に直結するという事態を招来した。ヒトを対象とする医学と、ヒト以外の生物を対象としてきた生命科学との関係は以前から密接ではあったが、両者が実質的に融合して「生命医科学（biomedicine）」となったのは二〇世紀の後半、分子生物学がさかんになってからといってよいだろう。

たとえば、人と人がハグをしたり、お母さんが赤ちゃんに母乳をあげると、オキシトシンという神経伝達物質が増えて、落ち着いた感情がもたらされる、といった類の研究結果がある。こういった実験の結果は科学的「事実」である、すなわち、価値をともなわない中立な事柄である、と研究者たちはいう。それはそのとおりだし、オキシトシンの話は科学的にとても興味深い結果なのだが、それがひとたび科学界の「外」に出てしまうと、人に関する事実の記述が、たちまちある種の価値を帯びてしまう事態は避けられない。

オキシトシンが出て気持ちが落ち着くのだから、お子さんをハグしてあげましょう。赤ちゃんには母乳をあげましょう――。オキシトシンが出て気持ちが落ち着くことと、その状態を積極的に求めるべきだということのあいだには、［　①　］。「気持ちが落ち着くのは良いことだ」という無意識の価値判断や好みがはたらいて初めて、つながっているように感じるにすぎない。

価値は事実には還元できないというのは、「自然主義の誤謬（ごびゅう）」として知られる、科学的事実を取り扱う際の大原則である。

極端な例を出せば、ヒトラーのユダヤ人虐殺政策は、進化学的・遺伝学的にゲルマン人より劣っているユダヤ人は排除するべきだという話だから、この②誤謬を犯している典型的なものだ（もっともこれは、前提となっている科学的事実自体がそもそも間違っているのだが）。「お子さんをハグしてあげましょう」も「母乳をあげましょう」も、ヒトラーほどひどくはないけれども同じ誤謬を犯していて、そのことは、科学者たちがこういう言明が出るたびに繰り返し強調していることではある。みなさん、また同じ過ちを繰り返すんですか、と。

しかし、ぼくたち人間の特性や性質についての「科学的事実」が世に出たときに、この自然主義の誤謬を犯さないことを求めても、それはそれで無理筋というものだろうと思う。ぼくたち自身、③そういう「説明」を求めているところがあるからだ。

アメリカの認知科学者ティーナ・ワイスバーグらは、ぼくたちは自然現象や心理現象については一段階下位のレベルでの説明（還元論的説明）を欲し、そのような説明が不適切な場合であっても、科学的な用語が使われるだけで満足してしまう傾向――知識の「誘惑幻惑効果（seductive allure effect）」――があることを報告している。

だから、今の世の中、科学的事実の少なくとも一部は、社会的価値と無関係ではいられないのだ。これは科学者、研究者の側の心構えだけでなく、科学知識や技術を使う社会、一般市民の側の心構えの問題でもある。

知識の「誘惑幻惑効果」は、本書の議論にとって重要なので、少し詳しく見ておこう。

ワイスバーグらが最初にこれを報告したのは二〇〇八年。彼女と同僚たちは、イェール大学二年生の秀才たちを対象とした脳神経科学入門講義の最終回に、ある実験をおこなった。人間の認知に関する現象がなぜ起こるかを説明したいくつかの文章を読ませて、その良し悪しを判定してもらうというものだ。

説明文は、学術的に妥当なものと不適切なものの二種類があり、さらにそれぞれが科学的用語を含むものと含まないものの二種類ずつ、計四種類が用意された。二種類の妥当な説明の内容は、科学的用語の有無を除けば、まったく同じものである。不適切な説明も同様。これらを比較することにより、科学的用語の有無が、読み手への説得力にどのように影響するかを測定できるというわけだ。

脳神経科学を学んだ経験のない一般人は、不適切な説明であっても科学的な用語が加わっていると、説明の内容部分は同じなのに、科学用語がない説明より高く評価した。

それに対して専門家は、科学的用語の有無にかかわらず、不適切な説明文は低く評価した。さらに、適切な説明文に科学的用語が加わったものは、その科学的用語の内容が不正確であり説明内容に適していないとの判断から、科学的用語がない説明よりむしろ低く評価した。

しかし、脳神経科学入門の講義を半年間聴いてきた学生たちは、専門家とは真逆の反応を示した。一般の素人と同じく、不適切な説明文でも科学的用語があれば、そうでないものより高く評価し、さらにあろうことか、適切な説明文でも科学的用語が加わったほうを、より優れた説明と評価したのだ。これは、専門家の判定とは正反対だ。

つまり、脳神経科学の知識をもっていることと、それらの知識を適切に使うこととは、まったく別の能力なのである。むしろ、［ ④ ］。知識は、使うように使うようにと人を誘惑し、幻惑する。

この研究は、その後も追試や関連研究が続けられており、二〇一六年には、知識の誘惑幻惑効

果は脳神経科学に限らず、物理学や数学、心理学などでも広く見られることが報告されている。普遍的かつ強力なのだ、知識の魔力は。

この知識の誘惑幻惑効果は、二つのことを示唆している。

ひとつは、説明を受ける側が、［　⑤　］こと。もうひとつは、説明をする側がなまじ科学的な知識をもっていると、［　⑥　］ということ。

科学的な根拠が明確でないことにまであたかも科学的根拠があるかのように語ることは、良いことではない。それはもはやトンデモ科学、疑似科学であり、医学の領域でそのようなインチキ治療法が語られると、人の生き死に関わる暴力的な行為となる。

だが、ぼくたちは仮にそれがインチキであっても、科学的「であるかのような」説明を喜んでしてしまうし、喜んで受け取ってしまう傾向をもっているのだ。

かといって、専門家が科学的に厳密であろうとすればするほど、その言明は条件付き、留保付きのものにならざるをえず、日常の生活場面での行動指針としては「くその役にも立たない」ことになりがちだ。科学的な言明は、日常生活場面で使える形に「翻訳」しないと使えないことが多いからだ。

これは、「科学者は断定しないから、科学的な成果をどう活用したら良いかわからない」という知識の表現の形の問題だけではなく、科学的知識を日常生活場面の「どこ」に、「どのように」当てはめることができるのか、という適用範囲と形態の問題でもある。そして、科学で必要とされる知識と日常生活で必要とされる知識とでは、そもそも性質が根本的に異なるのである。

（佐倉　統『科学とはなにか　新しい科学論、いま必要な三つの視点』一部省略）

設問1　空欄［　①　］に入る適切な語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　じつは必然的なつながりがある

イ　実際のところ相当な範囲ではつながっている

ウ　じつはつながっていると感じている

エ　じつは何の論理的つながりもない

オ　実際のところつながっているように見えている

設問2　傍線②の誤謬の内容として、ユダヤ人はゲルマン人より劣っているということと、ユダヤ人を排除するということのつながりについて、これまでに筆者が行った説明の形に沿って三行以内で説明しなさい。

設問3 傍線③において、筆者は、どのような「説明」を求めているのか二行以内で答えなさい。

設問4 空欄 ④ で書かれたことの内容を二行以内で説明しなさい。

設問5 空欄 ⑤ に適切な語句を一行以内で答えなさい。

設問6 空欄 ⑥ に適切な語句を二行以内で答えなさい。

三　次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

丁重で上品な物腰が日本人の特性であることを、外国人旅行者は気づいている。礼 politeness は、もし単に品のよさが損なわれるのを恐れてなされるのであれば、貧弱な徳である。なぜなら、本当の礼とは、［　①　］のあらわれだからだ。

礼は、また物の道理を正しく尊重すること、それゆえ社会的地位に対し相応の敬意を払うことを意味する。社会的地位は、［　②　］を示しているのではなく、本来、［　③　］があることを示しているからである。

礼は、その最高の形においてはほとんど愛に近づく。私たちは、敬虔な気持ちで、礼は「長い苦難にも耐え忍び、親切で妬(ねた)みの心を持たず、誇らず、驕(おご)らず、非礼を行わず、自分の利を求めず、憤らず、慢心しない」ことだと言うことができる。アメリカの動物学者ティーン教授が、人間性の六つの要素をあげた中で、礼こそ社交が生んだもっとも成熟した果実であるとして、高い地位を与えたことも不思議ではない。

私は、このように礼を称揚するが、決してこれを徳の第一位に置くものではない。これを分析すると、礼は、［　④　］に気づくであろう。――そもそも孤立して存在する徳などないのである。

礼は、武士特有の徳として賞賛され、その価値以上に高い尊敬が払われたので（あるいはむしろ払われたがゆえに）、その偽物が出るようになる。孔子も、見せかけの礼が礼でないのは、音が音楽でないのと同じであると、くり返し教えた。

礼が、社交に不可欠な要件にまで高められる時、若者に正しい社交的態度を教えるため、礼儀作法 etiquette の詳細な体系が流行するに至るのは当然であろう。他人に挨拶する時は、どのように頭を下げなければならないか、歩き方、座り方はどうでなければならないかが、細心の注意をもって教えられ、学ばれた。

食事の作法は、一つの学問にまで成長した。茶を点(た)てて飲むことは、儀式にまで高められた。もちろん、教養のある人は、当然これらすべてに精通していることが期待された。アメリカの社会学者ヴェブレン氏が、その興味深い著書の中で、上品な礼を「［　⑤　］」と呼んでいるのは、まさに適切であろう。

ヨーロッパ人が、日本人の礼にある細々とした規律を軽んじていう言葉を耳にしたことがある。そんなものを厳格に守ることは、私たちの思考からあまりにも多くを奪い、その意味において馬鹿げたことだと批判されてきたのである。

礼儀作法の中に不必要な細かい点があることは私も認める。しかし、礼儀作法と、西洋人がたえず移り変わる流行に固執するのと、どちらがより馬鹿げているかは、はっきりとは判定しないでおこう。また、流行でさえ、私は単に虚栄心の変種だとは考えない。むしろ私は、流行とは人の心の絶え間のない美の探求とみなしている。

ましてや私は、細かい儀礼をまったくつまらないものとは考えない。というのも、［⑥］を示すものだからである。

およそ何かをしようとするなら、それをするための最良の道が必ず存在するはずである。その最良の道こそは、もっとも効率的であるとともに、もっとも［⑦］な道である。イギリスの哲学者スペンサー氏は、［⑦］を定義して、もっとも効率的な運動の仕方と述べた。

茶の湯の作法は、茶碗、茶杓（ちゃしゃく）、茶巾（ちゃきん）などの取り扱いに、一定の明確な手順を定めている。初心者には、茶の湯は退屈である。しかし、その規定された手順によって、結局は時間も労力も一番節約されることが、ほどなくわかる。言い換えれば、もっとも経済的な力の使い方、――スペンサー氏の言葉によれば、もっとも［⑦］な力の使い方であることを発見するのである。

（新渡辺稲造著　山本博文訳『現代語訳　武士道』一部省略）

設問1　空欄［①］に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　品の良さがにじみ出る素性
イ　他人の気持ちを思いやる心
ウ　失敗を怖れない心持ち
エ　丁寧さに包まれた品性
オ　心の平静を維持する心情

設問2　空欄［②］に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　金銭的な貧富の差
イ　儀礼的な品質の差
ウ　能力的な優劣の差
エ　名目的な上下の差
オ　年齢的な老若の差

設問3　空欄［③］に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　成功者としての結果による差
イ　仕事を終えた際の評価の差
ウ　家族の協力をいかに得たかの差
エ　仲間からの信頼の差
オ　実際の価値にもとづいた差

設問4 空欄 ④ に入れるべき語句を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 徳とともに人間性を高めていること
イ 徳そのものを体現していること
ウ 他のより高い次元の徳と相関関係にあること
エ 礼こそが徳を深化させるものであること
オ 徳と同一次元の価値であること

設問5 空欄 ⑤ に入れるべき言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 有閑階級の生活の産物であり、その特徴
イ 上流階級の歴史の果実であり、その栄誉
ウ 一般階級の勉学の集結であり、その成果
エ 社交階級の作法の集約であり、その表現
オ 中流階級の上昇の作法であり、その発展

設問6 筆者は、空欄 ⑥ において、細かい儀礼をつまらないものとは考えていない理由を示しているが、その内容を一行字以内で書きなさい。

設問7 空欄 ⑦ にはいずれも同じ用語が入るが、その用語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 華麗
イ 安全
ウ 流麗
エ 安心
オ 優雅

四　次のカタカナを漢字に直しなさい。

設問1　ゴウガンフソン

設問2　ランエイココウ

設問3　アビキョウカン

設問4　タキボウヨウ

設問5　ガッショウレンコウ

設問6　シュウビを開く

設問7　キョクガクアセイの徒

設問8　シュツランの誓